

平成30年度 学校評価書(自己評価)

山形県立鶴岡中央高等学校

1 教育目標（建学の精神）

- ① 自ら思考し、創造し、自学自律の態度を身につけた人間を育成する
- ② 広い視野と洞察力を持ち、豊かな人間性と果敢な実行力を備えた人間を育成する
- ③ 自他を敬愛する精神を培い、地域や社会に奉仕し、貢献できる人間を育成する

2 本年度の重点目標

生徒が良質なモチベーションを持ち、成果が上がるように支援し、褒めて育てる、コミュニケーション豊かな教師集団と学校が大好きな生徒のいる学校をつくる。

- ① 時代にふさわしい鶴岡中央高校の将来構想を検討・創造する
- ② 生徒の資質・能力を最大限に引き出す教育環境をつくる
- ③ 一人ひとりの着実なキャリア形成を進め、高い志を育てる
- ④ 日々の指導を通じて、自他を尊重する態度と他者に伝える力を育てる
- ⑤ みえる学校、地域に信頼される学校づくりに努める
- ⑥ 学校運営組織を活かし、ゆとりある教育環境をつくる
- ⑦ 新大学入試制度や学習指導要領の改訂を見据え、教育課程や学習指導法の研修に努める。

——— 立志・気づき・共生 ———

評価基準	A 達成
	B 概ね達成
	C やや不十分
	D 不十分

重点目標	具体的方策	自己評価		学校関係者評価 意見・要望	
		今年度の成果と課題	来年度への改善点		
時代にふさわしい鶴岡中央高校の将来構想を検討・創造する	① 本校教育活動の強みを発信し、弱点克服に努める	H31の総合学科学級減に向けて、普通科を含めた本校の将来構想について検討を重ね、今年6月に教育計画書と教育課程が完成した。	B	引き続き、鶴岡中央高校の将来構想を検討・創造していく。	「地域に開かれた学校」という目標に添えて、先端的な取り組みを展開してきている。今年校訓とされた教育理念を共有して前進してほしい。普通科の活性化が課題だと感じる。特色ある学びを、是非、お願いしたい。生徒のニーズに応じて、様々なコースを設定するなど、カリキュラムの工夫も必要。「地域で活躍する人材の育成」が鶴岡中央高校に求められている。鶴岡中央高校は地域を担う人材を育成している。これからも、地域に残り、あるいはもどって活躍してくれる人材育成を期待している。鶴岡中央高校の普通科・総合学科それぞれの特色ある学びとはいったいどのようなものか。改めて考えてみる必要がある。
	② 地域の中学生や保護者、鶴岡市や関係団体、企業等から期待される学校について研究する。		B		
生徒の資質・能力を最大限に引き出す教育環境をつくる	① 普通科においては、将来の学びも視野に入れ切磋琢磨し、確かな学力をもとに進路実現できるように、一層学力を向上させる。	各教科において、「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業展開を工夫している。生徒満足度調査の結果、学習分野の評価が相対的に低くなっている。生徒の学力差が開いているという指摘もある。総合学科は、各系列とも地域と連携した特色ある取り組みを実施した。	C	授業改善に関わる教科としての年間のテーマを設定し、その効果を検証してもらう等の対策を行っていく。普通科の活性化を進めていくために、今後も学力分析会を実施する等、各年次・各教科と課題意識の共有化を図り、学習習慣の定着と学力向上に努めていく。	スパイバーや先端研の隣にある立地条件を生かし、連携を深め、研究助手など意欲のある生徒をどんどん育ててほしい。引き続き、学習環境の定着に向けて尽力していただきたい。生徒の満足度調査の結果、学習分野の評価が相対的に低くなっているのが気になった。いかにして生徒のモチベーションを高め、学習習慣を身につけさせるかが大きな課題である。
	② 総合学科においては、地域との触れあいを大切にし、課題研究を核として、社会で活躍するための学力と高いスキルを身につけさせる。		B		
	③ 研究機関との連携や、地域の自然・伝統文化・歴史遺産等の活用による学習機会を拡大させ、本校教育を充実・発展させる。		B		
	④ 普通科・総合学科それぞれの、特色ある学びを進展させる教育課程の編成と実施に努める。		B		
一人ひとりの着実なキャリア形成を進め、高い志を育てる	① 普通科の「キャリア探究」、総合学科の「産業社会と人間」「総合学習」「課題研究」を基軸とした「やる気」の誘発とキャリア形成を進め、進路希望の実現を図る。	各年次のキャリア教育の取組みは計画どおり実施することができた。進路指導に対する生徒・保護者の評価は高かった。1年次は大学・企業見学、職業体験学習、2年次は希望によりインターンシップ、オープンキャンパス等に取り組み、これからの進路への意欲につながるよい機会となった。	A	各年次のキャリア教育を「主体的・対話的で深い学び」につながるよう改善を加えていく。普通科・総合学科ともに地域との連携を意識した探究的な学習を継続する。	高校に入ってから進路を考えるという生徒が多い現状があるのではないかと。入学時のガイダンスを学習と進路に限って実施してはどうか。特に普通科に必要なと感じる。最初の一週間が決め手となる。インターンシップを強化し、企業訪問、見学、体験等、これまで以上に積極的に取り入れるようにしたらどうか。慶応先端研の研究助手制度の活用をはじめ、これからは生徒さんの夢の実現に向けてがんばってほしい。キャリア教育の取り組みが計画通りに実施できていることは高く評価できる。こうした取り組みが民間就職の大幅増につながったものと思われる。
	② 学習習慣など有効な時間の使い方を身につけさせ、将来を見据えて規律ある生活を確立させる。		B		
	③ 複数教員による相談活動等のサポート体制を確立し、学びを広め深めるための情報活用を育てる。		B		
日々の指導を通じて、自他を尊重する態度と他者に伝える力を育てる	①相手の立場や周りの状況を考え、正しいネット社会のあり方を理解させる。	課題を抱える生徒に対しては、担任を中心に、年次や各分掌、MH委員会等が連携し、組織的に対応している。いじめアンケートの結果をうけて、必要な生徒と面談を行うとともに、情報を共有し組織的に対応している。学校祭等の諸行事への満足度は高く、3年次生のリーダーシップが発揮された。部活動では複数の部がインターハイ、全国高総文祭に出場し、活躍した。県の方針に則り、本校の運動部活動方針を策定した。	B	生徒会を始めとして、学校全体であいさつの励行を進める。交通事故の防止、貴重品管理、スマホ、SNS利用について、日常的に注意を喚起していく。ボランティア活動について、これまで以上に情報を提供し、活動を広げるよう意識的に勧めていく。本校運動部活動方針のもと、生徒にとって望ましいスポーツ環境を構築するとともに、教員の働き方改革を推進していく。	関係する外部講師(ボランティア)に他者に伝えるコミュニケーション能力育成を依頼し、放課後等に講座開設してはどうか。会得すれば使える「技」と「心」を磨くことができる。生徒会活動の活性化を図っていく。SNSのルールを生徒会やPTAも含めて協議したり、生徒会が中心となってボランティア活動を行ったりすることも良いと思う。生徒会役員のみなさんと懇談して感じたことだが、自己主張や将来設計がしっかりできており、日頃からの教育の成果と思われる。自転車のマナーアップを更に進めていただきたい。アクティブ・ラーニングの推進という観点からも、プレゼンテーションを意識した授業を今後とも継続的に実施することが望まれる。
	② 日々の挨拶や対面したコミュニケーションを大切にすると共に、プレゼンテーションを意識した授業等を実践し、他者に伝える力を身につけさせる。		B		
	③生徒の悩み・変化を見逃さない観察・声掛けと積極的な談話活動を実施する。		B		
	④ 生徒会・各種委員会・部活動等の課外活動において、生徒の創意や自主性を育みながら、人格の錬磨に努めさせる。		B		
	⑤ 外部機関と連携して各種相談活動を充実させる。MH委員会の機能を強化し、生徒・保護者へのきめ細かなサポートを実施する。		B		
みえる学校、地域に信頼される学校づくりに努める	① ホームページ・掲示板・各種たより等による保護者や地域への広報活動を更に充実させるとともに、地域との交流を活発にする。	学校ホームページの更新はタイムリーに行うことができた。また、本校生を紹介した新聞記事も即時的に掲示した。PTA理事会・専門部会への参加者は昨年度よりも増加した。年次を中心にマ・メール(メールによる学校連絡網)し、家庭への情報提供を行った。同窓会・PTAの協力をいただきながら、創立20周年記念事業を実現・成功することができた。	B	引き続き学校ホームページや掲示板を活用し、時宜を得た適切な情報発信に努めるとともに、マ・メールを活用して家庭への情報提供を行う。	先生がつかなければ校外に出せない状況の中で、先生方の負担軽減の上からも公認された責任ある団体の社会活動に参加させるモデルをつくってほしい。シルクガールズの取り組みやいきいきまちづくり補助金を活用した取り組みなどを通じて、地域づくりに貢献いただいていることに感謝申し上げる。今までのように、ホームページや学校便りによって、情報発信、情報提供を続けていく。学校ホームページや広報誌「時代は中央」は充実している。創立20周年記念事業の広報も「みえる学校」づくりの良い機会になったと思われる。
	② 学校公開と情報発信、地域の期待に応える学校づくりに努める。		B		
学校運営組織を活かし、ゆとりある教育環境をつくる	① 教職員間・分掌間の相互理解と連携に努め、組織力の強化と業務の効率化をめざす。	各年次と分掌が連携して教育活動を行っているが、連携が不十分という指摘もある。グループウェアの活用が進んでいる。	B	組織連携の弱い部分を検証し、相談しやすい職場環境づくりに努めるとともに、教員数減に対応した学校運営体制を検討していく。引き続き情報管理を徹底する。	世代間、男女間で「働き方改革」への意識も意欲も大きく異なる。「多忙」を客観的に分析し、「多忙感」を軽減すべき。仕事を教え上げて、それだけでくたびれている人もいる。具体的に動くことが大切である。超勤削減を推進し、ゆとりある教育を行うとともに、教職員相互間の連携を図ってほしい。働き方改革による業務の削減や効率化を図り、その分、先生方のコミュニケーションを増やしてほしい(実際にはなかなか難しい)。教員数減に対応した学校運営は今後の大きな課題になるであろう。そのためにも各年次、分掌の連携はこれまで以上に必要不可欠であると思われる。
	② 情報ネットワークの活用と情報管理の徹底を図る。		B		
新大学入試制度や学習指導要領の改訂を見据え、教育課程や学習指導法の研修に努める	① 推薦・AO入試対策の見直しとアクティブラーニング・探究活動の研修と実践に努める。	大学入選改革対応プロジェクトチームを立ち上げ、高大接続(大学入試)改革についての校内研修会を実施した。外部の研修にも数名の職員が参加した。学習指導要領改訂関係では、職員研修会を実施し、周知・徹底を図った。	B	大学入学共通テスト実施に向けて必要な対策について、教科指導面や進路指導面から整理する。新学習指導要領に応じた本校の教育課程の編成に着手する。	大変な時代をむかえるが、今と明日を見据えて取り組んでほしい。良好な関係を結んできた先端研との関係や推薦校制度を有効に活用し、遅咲きの本校生徒の明日を開くように切望する。日々の授業改善から始めることが大切かと思う。教師の説明を短くして、生徒が自ら考えて取り組んだり、複数で相談して解決したりするような時間を増やすことが大切ではないかと考える。推薦・AO入試対策の見直しをはかり、大学入試共通テストの実施に向けて随時必要な対策を講ずることが求められる。近い将来大学入試制度も大幅に変わるので、既存のプロジェクトチームを中心に年間を通じて課題に取り組んでいただきたいと思う。